

『パン屋、ジビエ料理に挑戦!!(2)』

文 木村安兵衛

text by Yasube Kimura

所

轄警察署で鉄砲を所持したい旨を伝えると怒声一発「何を考えるんだ！この野郎！ここは法治国家日本だぞ！」となるのでした。内心そりゃそうだろう、日本で鉄砲を持つなんて無茶な話だよな、と納得をしながらもジビエを仕事で扱っている、野獣処理工場を衛生管理の確認で回ったり、猟友会やプロの狩猟会社を回って仕入れを行っている、猟師達から仲間になったのだから一緒に鉄砲を持って狩りに参加しようとの提案をもらった、等々を伝えると、それまで罵声を浴びせていたお巡りさんは落ち着いた口調で席に着かせてくれました。

出口で知ったのですが、そこは取調室でした。取調室は被疑者と警官の座る椅子が違っています。もちろん被疑者のほうが座り心地が微妙に硬くできているのです。こうして被疑者はアウェイな環境で追い詰められていくのだな、という事を図らずも実感し、犯罪は犯すまいと改めて心に誓うのであります。

署では簡単に所持希望動機について話をし、仲間になった？と思われる鉄砲の所持者の身元確認、本人の身元

確認及び犯罪歴について陳述させられます。ここでは交通違反なども込みで話しました。履歴、職歴、仕事内容などの身の上話をしていると裏でコンピュータで照合している刑事さんが「それっぽっち？そんなわけないだろう！もう1回調べろ！」と大声を出しております。人を顔で判断すると必ずこうなるのです。本人は端正でかわいいと思っている顔も世間一般、特に警察では極悪人に見えるのだと知り落ち込むのであります。

申請から7カ月の時間を経て1丁の猟銃が我が手元にやってきました。子供の頃からモデルガンや空気銃を買ってもらった事がほとんどなかった私は、あまり銃に興味を持つ事がありませんでした。そんな私の手元に本物の銃がやってくるとその独特な威圧感と恐怖感に圧倒されてしまうのであります。

車や包丁で人を傷つけてしまった：これは道具の使用ミスまたは運用の間違いであります。鉄砲はその物の本来の目的が何かを殺傷することであり、抜き身の刀のような妖気が纏わりついていて身震いしてしまう程です。

このような物で事故を起こしてしまつたら自分の人生、相手の人生が台無しになってしまう恐怖感で、1カ月間は家族を守る為に、強盗に銃を持つて対峙するか、不利でも素手で戦うか等と悩む夢を見続けるのであります。事故を起こさぬように、慣れる為に練習を積むこととなります。1年間は射撃場で練習。約2000発を撃ち込むのであります。

銃の安全管理、取扱い、マナーなど一通り身につけた自信が持てた頃、いよいよ本年の猟期が始まるのであります。先ずは日本で最初に猟期が始まる北海道にて、私の狩猟デビューです。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社プランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2017年現在29店舗を数える。

